

ふるさと再発見

～幕末維新と徳地～

島地と高杉晋作

元治元年(1864年)、禁門^{きんもん}の変と下関戦争で長州藩が敗北すると、幕府へひたすら謝罪降伏して藩を守ろうとする人々(恭順、俗論派)が実権を持ち始めました。彼らは尊王攘夷を訴える急進派(正義派)を一掃するとともに第一次長州出兵が迫る中、禁門の変の責任者3家老に切腹を命じ、参謀ら11名を野山獄^{のやまごく}で斬首します。

失政への過酷なまでの追及は高杉晋作にも迫ってきました。10月25日未明、身の危険を感じた彼は萩を脱して山口へ入り、井上聞多^{いの上きんた}(馨)を見舞って徳地の正慶院に山縣有朋を訪ねます。10月27日の奇兵隊日誌には「夜、高杉和助(晋作)来たりで談す。夜半、富海^{ふかい}へ罷り越す。」また山縣有朋の自叙伝、懷舊記事^{かいきゅうきじ}には「二十七日、高杉は徳地の本営に來り、予(私)に会して将来の方策を議し…」と、ここ徳地で高杉晋作と将来(決起のこと)を論じたと記しています。その後、彼は富海へ出て下関へ向かいますが、どのように富海へ向ったのかは分かりません。高杉晋作の記録が次に表れるのは10月29日です。下関の白石正一郎の日記で「二十九日昼、萩より高杉東行君^{とうぎょう}ひそかに來訪…」と出てきます。

旧暦の10月28日の未明(3時ごろ)に正慶院を出発したことは記録に残っています。徳地の寺々を組織し、急変した藩論の中で奇兵隊を受け入れた徳地全域は正義派へと傾いていたと考えられます。島地では昔から「高杉晋作は島地に泊まった。」との話がありますが、うそではないと思われます。正慶院から島地へ、潜泊して観念寺横の山道をぬけて藤木立石^{たていし}を通って湯野温泉、それから山陽道を下って富海^{ふかい}の大和屋政助を訪ねたのでしょう。富海に泊まった記録はありませんので、徳地の人々が協力して高杉晋作を守り富海へ送ったものと思われます。

(徳地幕末維新歴史放談の会 代表 山田 文雄)



高杉晋作(山口県)



島地の町 遠景



藤木立石